破壊の王

渚ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
破壊の王

【Ｎコード】
Ｎ３７２２Ｈ

【作者名】
渚ハル

【あらすじ】
そう、それは祝福だ。誰が何と言おうとそれは俺にとっての祝詞だった。「お前を殺す」現れた男は俺に殺気をぶつけながら宣言した。甘美なる世界の幕開け。殺戮の朝、虐殺の昼、鮮血の夜。俺の日常を染め上げていく悪魔崇拝者達。人にあらざる力に追いつめられる俺。だが、まだこの人生最良の日を終わらせはしない…。「ははは っ、人じゃ勝てないってんなら人なんてやめてやるよっ！」

プロローグ

―漆黒。
そうその場所にはその名こそが相応しいだろう。
どこまでも続く深い闇。
終わりのない永劫。
果てしなき虚無。
そこはただただそんな空気が漂う現世における地獄そのものだ。

「リーゼンベルグ卿」

その地獄に少女の凛と透き通った声が響き渡す。
真っ赤な赤毛と同じく燃えるような紅蓮の瞳。
整った容貌はキリッと少女の意志の強さを物語っていた。

「どうしたのだ？ベルゼトス卿」

答えたのは漆黒の渦中。
今まで何もなかったように見えたその闇の中、さらなる深き闇を宿す男がいた。
七つの席のある丸い円上の卓の腰掛ける姿はぞっとするほどの存在感を恐怖と共に表していた。
髪も目も底なき深淵。
本来、白く美しい輝きを放つはずの彼の肌は光なき白。
罪深き光。
その男の静謐ながら威厳のある声を受けて、少女は頭を垂れる。

「はっ！ボルガノック卿が計画の開始を……と」

その声は若干の恐れを含みながら、しかしその大半は歓喜で彩られていた。
頬が一瞬緩むが、少女を改めて気を引き締め、敬愛するリーゼンベルグの言葉を待つ。

「ほぉ……ウェスティーが……そうか、ついに始まるのだな…我らが悲願…」
「左様にございます」

少女は顔を上げ、リーゼンベルグの目を正面から見つめる。
それはまさしく狂信者の目。
己がすべてを他者に捧げた自己なき—しかし決して挫けぬ覚悟のある瞳。
そお瞳で己を捧げた悪魔を見る。

—シュバイン・サマエル・リーゼンベルグ。
悪魔崇拝者の集団。
『イルミナティー』を束ねる高慢なる首領。

そして、その傍らの少女は—

—ルカ・レヴィアタン・ベルゼトス。
『イルミナティー』の最高指導部（ブナイブリス）たる一人。

最高指導部は全部で七人存在しており、そのそれぞれのミドルネームには悪魔の名が冠されている。

—シュバインなら毒の王たる魔帝サマエル。
—ルカには海王レヴィアタン。

その他にもベルゼブブ。
マモン。
ベルフェゴール。
アスモデウス　。
ベリアルを冠する者がいる。

「ははっ」
「ふふっ」

シュバインとルカは同時に笑みを漏らす。
二人の美しい容姿が歪む。
禍々しい狂気を映した笑み。

『イルミナティー』には目的があった。
失敗の許されない最凶最悪の目的。
それこそは『イルミナティー』の悲願。
彼らが「神」と崇めるお方のこの世への降臨。

「ははははははっ」
「ふふふふふふっ」

邪悪な力を身に纏いながら彼らは哄笑する。

―さぁ、地獄で踊ろうではないか！

俺は不感症だ。
俺は俺の上で激しく腰を振る女を眺めながら、改めてそう思った。
不感症といっても、性欲に対するもんではなく、心に対するものだ。

つまり―

「ああっ！」

女が喘ぐ。
男ならば誰もが目を奪われる美貌を持つ美女が俺の上で淫らに喘いでいる。
だというのに……。
俺の心には常に靄がかかっていて晴れない。
気持ちは良い。
ああ、確かに気持ちは良いさ。
だけど、これじゃあダッチワイフと何ら代わりはない。
女に対して何の感慨も浮かばないのだ。
彼女が美しいのは認めよう。
しかし、それが何だと言うのか？
俺のいう美しさとはミロのヴィーナスに代表される「物」に対しての感想と同じだ。
俺は目の前の「物」を下から突き上げる。

「ああんっ！」

びくびくと身体を痙攣させる女。
どうやら絶頂に達したようだ。

それに促されるようにして俺も―

目が覚めると朝だった。
鳥が囀り、強くなってきた日差しがカーテンを突き抜け、僅かに俺に降り注ぐ。
その気持ちの良い陽光を受け、俺は完全に目を覚ました。

「はぁ……」

行為に後はいつも虚しさを感じる。
まぁ、それはこの行為に限ったことではなく、慣れたものだが、やはりどこか寂しかった。

「何溜息なんてついてんのよ」

呆れた声。
それは間違いようもなく俺に向けられていた。
さっきまで貪り合っていた美女―比奈柚香が俺を睨んでいた。
その事実に俺は再び溜息を吐きそうになるが、すんでの所で我慢する。
これ以上機嫌を損ねるのは精神衛生上好ましくない。そう決断を下して。

「もう学校に行かなきゃならない時間だからな。お前と離れるのが寂しいんだよ」

俺はそんな大嘘を事も無げに吐く。

しかし―

「馬鹿いわないで。最中だって私のことなんて気にしてなかったくせに」

「……」

女の勘は恐ろしい。

「別に貴方に恋愛なんて甘いものは期待してないけど……最中くらいは私の事だけ考えてなさいよ！」

それは女のプライドなのか、柚香はぷいっとそっぽを向いてしまう。

比奈柚香―俺よりも二歳年上の二十歳であり、金髪碧眼のアメリカ人と日本人とのハーフ。類い希なる容姿と抜群のプロポーションで数々の男を骨抜きにしてきたらしい。俺との関係はセックスフレンド。それ以上でも以下でもない。

柚香と出会ったのは半年前。

きっかけは陳腐であり凡庸で語る価値もない。

―ピンポーン。

ふいにインターフォンが部屋に鳴り響いた。

時計を見る。

八時。いつも通りの時間。

「彼女かな？」

「ああ、たぶんな」

俺は平然と答える。

すると、柚香は悪戯げな瞳で俺に言う。

「彼女がいるのに私とこんな事して…貴方最低ね」

「まったくだな」

俺は他人事のようにそう答える。

俺自身、心底そう思っているのだから笑えない。

その上、後悔も反省もなかった。

俺はインターフォンに出て、一言二言会話すると、急いで身支度と整えた。

朝食は食べない。

「じゃあな。鍵はいつもの所に。あとは好きにしろ」

「はいは〜い」

柚香は俺に手を振る。

俺はそれに後ろ手で答えた。

俺に両親はいない。

俺が生まれたばかりの時に死んだと聞いている。

ここはその両親が遺産として残してくれたものだ。

幸いな事に両親はそれなりに裕福だったようだ。

だから俺は好きな事ができる。

この倫理、という鳥籠の中で。

俺は—愛を知らない……。

プロローグ（後書き）

初めまして皆様。『破壊の王』始まりましたっ！
なるべく期間を空けないように更新しますので、どうか最後までお付き合いください。

ご意見・ご感想どしどしお待ちしておりますっ！
皆様のお言葉を頂くことが作者の何よりの励みになりますのでどうかよろしくお願いいたしますっ！！

第一幕　その名―瑠偉

「おはよう、瑠偉」
「ああ」

俺の恋人、北条真生が俺の名前―西山瑠偉の名を呼ぶ。
腰まで伸ばした黒髪に二重の瞳。
その物腰は柔らかく、まさに大和撫子という形容がよく似合う少女だ。

だが―普通の少女ではない。俺はとうの昔に気づいていた。
なにせ、十年来の幼馴染みだ。
真生のことはそれなりに知っていると自負していた……つもりだった。

「ねぇ？今日の放課後時間ある？」
「あ～、大丈夫だ」

俺は一瞬思考を巡らし答えた。
真生は俺の腕に自分の腕絡めるようにして抱きついてくる。

「じゃあさ、どっか行こうよ」
「どっかって？」
「それはまだ考えてないけどさ……」

そう言って真生は嬉しそうに今日の予定を考え出した。
本当に真生の考えている事が最近分からなくなってきていた。
こいつは―俺と柚香の関係を知っているはずなのに《・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・》。

今だって、今朝はシャワーを浴びる時間がなかったから柚香の香りが俺には染みついているはずなのだ。
なのに、真生は文句どころか笑っている。
悪いのは俺だが、真生も最近どこか奇妙なのも確かだった。

そうこうしている間に学校は目前に迫っていた。
『雪代学園』。
生徒数５００人ほどの私立高校。
特筆すべき点のない普通の高校だ。
俺は教室前で真生と別れ教室に入る。

「……」

俺に話しかけてくる奴など誰もいない。
孤高を気取るつもりはないがいつもこうなる。
自分で言うのもなんだが、俺程おもしろくない人間などめったにいないので、それも別段気にするようなことではないが……。
教室の朝の喧噪。
若い故に彼らは情熱に溢れている。
日々が煌めき輝いている。

―羨ましい。

俺はそれを羨望の眼差しで眺める。
些細な事で感動し笑い泣く。
この年代の人にしてみれば当たり前の事だ。
だというのに俺にはそれがない。
手を伸ばせば届きそうな距離にそれはあるのに、実際はその間には越えることの出来ない壁が悠然とそびえ立っていた。

やがて俺は諦める—否、逃げ出す。

「馬鹿らしい。そんなもんが何になる」

それしか許されていないが故に……。
なのに心は求め続けるのだ。
欠けた物を。
決して埋まらぬその心に空いた空洞を満たすために。
どうしようもない餓え。
何をしていても満たされない。
やがて俺は世界から放逐されることだろう。
この餓えを理解できない者からしてみれば、俺は異物。
人は理解できないものに対して恐怖を覚える。
それが摂理というのならば受け入れよう。
弱肉強食。
その時は俺が弱かったというだけの話。

でも—

「本当…羨ましい」

その言葉は誰にも届かなかった。

昼休み。
俺は真生と昼食を摂っていた。
真生お手作り弁当。
ここ半年ほど、毎日のように真生を俺のために弁当を用意してくれていた。
その内容を見ると、真生がどれほどこの料理に力を入れているのかが一目で分かる。
唐揚げ、卵焼き、きんぴら、ミートボール。
それらはお弁当の定番メニューだが―

「また全部手作りか？」
「当たり前じゃん！」

真生はそう言って胸を張って笑う。
その弁当には冷凍食品など一切入ってはいない。
それどころか、この半年でこの弁当箱に冷凍食品が入っていた事など一度たりともなかった。
俺は唐揚げを箸で摘んで口に放り込む。

「……おいしい？」
「ああ、旨い」

美味しくないはずがない。

「良かった～！」

子供のように無邪気に喜ぶ真生。いつものことだ。俺のたわいない一言でこんなにも感情を表現する真生を微笑ましく見守りながら、俺は軽い罪悪感に襲われた。

―真生はこんなに尽くしてくれているのに…俺は……。
同時に自分にもまだそんな感情が残っていたことに気づき、嬉しくなった。

「あれからもう三年か……」

知らず知らずのうちに俺の口からそんな呟きが漏れていた。
真生の表情が強張る。

「そう……だね」

三年前、俺は自動車事故に遭遇した…らしい。
というのも、俺はそれ以前の過去の記憶を失っているのだ。
幸い、日常生活に関する基本的な記憶を残っていたが、どうしても人の顔や名前は思い出すことができないのだ。
医者によると俺の感情の欠落も事故による影響らしい。

「ところで今日どこに行くか決まったか？」

気分を変えるように俺は話題を変える。
朝に話していたデートについてだ。

「うんっ！」

真生は俺の意図に気づき、花の咲くような笑みで頷いた。

「映画館！」

第一幕　その名―瑠偉（後書き）

ご意見・ご感想、どしどしお待ちしておりますっ！

美貌の少年

放課後。
授業からの開放感を感じながら真生と映画館に向かっていた俺は苛ついていた。

「もう…機嫌直してよ」

真生が苦笑しながら言う。
しかし、俺の苛立ちは収まらない。
こんな事は日常茶飯事なのだが、それでも許せないものは許せないのだ。不感症といっても、譲れないものくらいはある。

「あいつらの目は腐ってるのか？」
「違うよ。瑠偉って本当に綺麗な顔してるもん！」

真生が何故か自信満々にそう宣言する。
「綺麗」という単語を合図に、俺の記憶はまたしても、あの忌々しい出来事を思い出していた。

「ねぇ？君、可愛いね」
「学生？」

俺と真生はふいにかけられた声に振り向く。

男連れの女の声をかけるとは……こいつらのような人間をＫＹと呼ぶのだろう。
しかし、それだけならまだ良かった。
あろうことか、そいつらは俺の腰に腕を回して耳元で囁いたのだ。

「どっかで遊ばない？俺達奢るからさ」
「はっ？」

俺は一瞬、訳が分からずにポカンとした。
俺は今、学生服を着ている。もちろん男子のだ。
一筋の汗が背筋を伝う。
もしかして…こいつら……ホ―

「それにしてもさ、何で君男子の制服なんて着てるわけ？」
「・・・・・・」

こいつらは馬鹿か？
男子なんだから男子の制服着るに決まっている。

「瑠偉～！」

制服の裾が引っ張られるのを感じて振り向くと、真生が頬を膨らませていた。

「すぐ行く」
「ちょっと待ってよ！」

俺が馬鹿な男達の横をすり抜けようとすると、一人が俺の腕を掴んだ。

「離せよ」
「まぁまぁ、君、瑠偉ちゃんって言うんだ？可愛いね」
「何言ってー」
あろうことかその男は俺にキスしようと顔を寄せてきた。
俺が呆然としていると、キスしようとした男がものすごい勢いで吹き飛んだ。
「…あ、真生」
「あんた達、真生にキスしようなんて調子に乗りすぎじゃない？」
「「ひっ！！」」
そこには、いつもの笑顔ではなく、悪鬼のような冷笑を浮かべた真生がいた。
男二人は殺気をぶつけられ、全身を震えさせている。
「あんた達に教えてあげるわ。今、キスしようとした瑠偉は男よ。おーとーこー」
そんな当たり前の事を真生は喜悦を浮かべながら言った。
しかし、その言葉には絶大な効果があったようで、男達は身体を硬直させた。
「う、嘘だ！」
「あんなに可愛いのに！？」
「そうね。瑠偉は可愛いは。もう殺人的に！ああ～」
真生の目は完全に危ない人の目だった。
「身長１６５ｃｍ、少女のような華奢な身体、儚げで可憐な容貌、

透き通るような声、はぁはぁ、これで男なんて詐欺だわ……いや、むしろ男だからいいのかしら」

そんな事をぼそぼそと呟く真生にさすがの俺も引いた。
そして、事情がようやく理解できた。
つまり、こいつらは俺のことを女だと勘違いしていたらしい。
俺のように男らしい俺を女と間違えるなんてこいつらはどこを見ているのだろうか？
それと同時に苛立ちが沸き上がる。
俺にとって「可愛い」は禁句だ。
こいつらには現実を知ってもらわなきゃならない。

「お前らには教育が必要みたいだな」

俺がそう言いながら近づくと―

「ああ、やっぱり可愛いな…この際男でも…」
「教育してください！姫！」
「死ね！」

容赦は必要ないみたいだ。

そんな訳で今にいたる訳だ。
ちなみに、真生に関してはいくら注意しても「可愛い」発現を撤回しないので諦めている。
そうこうしている内に、映画館に着いた。

「あ～あれあれ！」

真生が看板の一つを指さす。

そこには、悪魔の絵と映画のタイトルが描いてあった。

『―原罪の悪魔』

美貌の少年（後書き）

夏休み前のテスト関係で、更新が送れてしまい、申し訳ございませんでした。これからはもう少し早く更新できるように、頑張ります！

ご意見・ご感想、どしどしお待ちしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3722h/

破壊の王

2010年10月13日07時37分発行